

研究結果報告書

日本の影響下でのモンゴル語定期刊行物に関する研究

所属：内蒙古大学 蒙古学学院 新聞出版学部

役職：講師

氏名：兵 軍

本研究は、日本の影響を受けていたモンゴル語の定期発行物を収集し、在日留学生時代、満洲国時代、蒙疆政権時代という三つの時期に分けて、それぞれの時期の新聞や雑誌の発行背景や発行機関、発行期間、編集者、掲載内容などを考察した。具体的な研究内容と成果は以下の通りである。

1929年に在日モンゴル人留学生によって発行されていた『祖国』には当時蒙のモンゴル社会の諸問題や自由と革命などを呼び掛け、モンゴル民族の啓蒙を目的とする内容の文章が多く掲載されていたことが明らかである。1935年4月13日から蒙古留日同郷会は『漠声』を発行し、1941年7月から『新蒙古』が出版された。これらの雑誌はモンゴルの輝かしい歴史を紹介し、民族感情を呼び掛けた評論や民族の文化や経済の遅れている状況を反省し、それを発展させる方法を紹介していたことが分かった。

満洲国時代の『モンゴル・セトグール』は興安総署総務処調査科によって1934年5月に創刊された。この雑誌は月刊で、B5版であった。『モンゴル・セトグール』には評論、モンゴル地域や世界ニュース、翻訳作品、日本語の講座、子供の欄などが掲載され、その内容は満洲国政府の意図で宣伝色が含まれているとはいえ、モンゴルの啓蒙と復興を訴える評論が多かった。また『モンゴル・シネ・セトグール』（蒙古新報）、『フフ・トグ』（青旗）、『ジャロースン・トリ』（青年の鑑）、『イフ・フフ・トグ』（大青旗）などの新聞・雑誌が発行され、これらの新聞や雑誌は日本や日本軍の宣伝色を含みながらモンゴルの文化向上を目指していたことが明らかである。

蒙疆政権時代の善隣協会、蒙疆新報館、蒙古文化館などから発行されていた『蒙古週刊』、『蒙古報』、『文化専刊』、『蒙古復興の声』、『蒙古復興』などの定期刊行物もその主な内容はモンゴルの復興や文化向上及び「東アジアの共同復興」であったことが明らかである。

研究成果の公表について(予定も含む)

口頭発表 (題名・発表者名・会議名・日時・場所等)

日本の影響下でのモンゴル語定期刊行物について・兵軍・モンゴル文化研究会・2015年5月8日・内モンゴル大学

論文 (題名・発表者名・論文掲載誌・掲載時期等)

日本の影響下でのモンゴル語定期刊行物について
『新聞論壇』(投稿中)

『モンゴル・セトグール』の特集『児童新聞』に関する考察
(原稿作成中)

書籍 (題名・著者名・出版社・発行時期等)